第 19 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入 賞 作 文 集



（令和６年度北方領土青少年等現地視察事業）

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目　次

			頁
1	発刊にあたって		1
2	実施要項		2
3	入賞作文の選考について		3
4	入賞者一覧		4
5	授賞式風景		6
6	歴代最優秀賞受賞者一覧		7
7	京都府北方領土教育者会議について		8
8	京都府北方領土教育者会議の取組状況		9
9	入賞作文		10
	○最優秀賞		
	京都府知事賞	南丹市立殿田中学校　大沢拓斗	
	京都市長賞	京都市立二条中学校　藤田紬希	
	○優秀賞		
	京都府教育委員会教育長賞	南丹市立園部中学校　吉田太陽	
	京都市教育長賞	京都市立西ノ京中学校　小玉すみれ	
	北方領土問題対策協会理事長賞	南丹市立殿田中学校　菅本美空	
	北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立開晴小中学校　最田千尋	
	北方領土返還要求京都府民会議会長賞	舞鶴市立白糸中学校　堀内唯愛	
	北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立加茂川中学校　小嶌理紗	
	京都新聞賞	南丹市立園部中学校　塩見新	
	京都新聞賞	京都市立音羽中学校　水上桜聡	
	ＫＢＳ京都賞	京丹波町立蒲生野中学校　西垣裕惺	
	ＫＢＳ京都賞	京都市立下京中学校　谷口俊太	
	○佳　作	井手町立泉ヶ丘中学校　小川あんじ	
		亀岡市立育親学園　小林賢太	
		京丹波町立和知中学校　山口みそら	
		京都府立木津高等学校　近藤寧音	
		京都府立須知高等学校　湊楓華	
		京都市立開晴小中学校　香月彩花	
		京都市立洛南中学校　青田栞	
		京都市立下京中学校　藤田あさぎ	
		京都市立久世中学校　西澤佐保	
		京都市立嵯峨中学校　三浦克仁	

発刊にあたって

「北方領土と私たち」作文コンクールも、今回で十九回、来年は節目の二十回目を迎えることになります。戦後八十年という長い年月の経過の中で、北方領土問題の風化、関心の低下という課題が顕著になってきていますが、毎年、京都府内の中・高校生たちがこの問題に関心を持ち、作文という形で自分の考えを表してくれることが、今後の北方領土問題の進展に向けて、大きな意味を持っていると感じています。

さて、本作文集の表紙を飾る写真は、令和六年度北方領土青少年等現地視察事業の時のものです。令和六年八月六日から九日にかけて、京都府の中学生たち十七名が北方領土隣接地域を訪れ、関係施設の見学や、元島民による引き上げ体験、当時の島の様子についての講話を聴くなどの研修を受けました。

猛暑の京都とは大きく異なる気候に生徒たちは感嘆の声をあげていましたが、研修が進むにつれ、島にはまぎれもなく日本人の生活があったこと、元島民の方々にとって島が今でもかけがえのないふるさとであることを実感しているようでした。そして、そのふるさとを失った心情、ロシア人への複雑な思い等を元島民の方から聴いたとき、生きてきた時代も場所も違うけれど、もしそれが「自分なら」どう思うだろう、どんな気持ちだっただろうと心を動かし、京都に帰ったらこの思いをもっと多くの人に伝えたいと考え始めている様子が伝わってきました。この心の動き、思いを持つ若者の存在が未来を作っていくと信じています。

京都府知事賞を受賞された南丹市立殿田中学校　大沢拓斗さん、京都市長賞を受賞された京都市立二条中学校　藤田紬希さんの作文からも、元島民の思いを受け取り、自分事として深く考え、この問題を多くの人に伝え、ともに歩んでいく仲間を増やしていきたいという強く頼もしい思いを読み取ることができました。これも中学生や高校生がこの問題を学び、深めるきっかけをいただいている関係者の皆様のご理解とご支援の賜物です。今後とも一層のご支援を心よりお願い申し上げます。

結びに当たり、応募していただいた生徒の皆さんや、ご指導くださった各校の先生方に感謝申し上げますとともに、ご後援いただきました京都府、京都市、京都府・京都市教育委員会、京都府・京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中学高等学校連合会、独立行政法人北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局、ＫＢＳ京都の皆様をはじめ、関係の皆様方に厚くお礼申し上げ、発刊の言葉とさせていただきます。

令和七年二月八日

北方領土返還要求京都府民会議
会長　石田宗久
京都府北方領土教育者会議
会長　平井祐子

令和６年度
第19回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

１　趣　旨　　京都の中学生や高校生等が、北方領土が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。

２　主　催　　北方領土返還要求京都府民会議　京都府北方領土教育者会議

３　後　援　　京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都府中学校長会、京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会
京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中学高等学校連合会
（独立行政法人）北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局
ＫＢＳ京都

４　テーマ　　「北方領土と私たち」にかかわる内容であること（題名は自由）

５　募　集　（１）対　　象　　京都府内の中学校、高等学校、義務教育学校並びに特別支援学校に在学している者
（２）募集期間　　令和６年６月18日（火）～12月６日（金）
（３）作品規定　　原稿用紙（400字詰）３枚程度
（４）応 募 先　　京都府北方領土教育者会議事務担当
〒629-1192　京都府船井郡京丹波町本庄ウエ16
京丹波町教育委員会　小森宛　TEL 0771-84-0028

６　審　査　　主催者において選定した審査員により審査

７　表　彰　（１）賞の設定
最優秀賞　２点・京都府知事賞・京都市長賞　各１点
優 秀 賞　10点・京都府教育委員会教育長賞　１点
・京都市教育長賞　１点
・北方領土問題対策協会理事長賞　２点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞　２点
・京都新聞賞　２点
・ＫＢＳ京都賞　２点
佳作・入選　若干点

（２）表彰式
令和７年２月上旬
（北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定）

８　その他　・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。
・最優秀賞・優秀賞・佳作の作文は作文集に掲載されます。
・中学生の上位入賞作品は北方領土に関する全国スピーチコンテストに応募します。

問い合わせ先	京都府北方領土教育者会議事務担当 （京丹波町教育委員会　小森　誠）
	0771-84-0028

入賞作文の選考について

1　応募の状況

応募校：１８校　　応募点数：１、１０９点

2　選考委員と選考基準

（１）選考委員会の構成

氏　名	所　属　等　（　）内は教育者会議の役職
平井　祐子	南丹市立殿田中学校校長（会長）
森　　茂昭	京都市立下京中学校校長（副会長）
山崎　直人	京都市立嵯峨中学校校長（運営委員）
田華　　茂	京都市総合教育センター指導主事（運営委員）
野間　慎吾	京丹波町立瑞穂中学校教諭（運営委員）
森　　哲也	南丹市立園部中学校教諭（運営委員）
小森　　誠	京丹波町教育委員会社会教育課社会教育指導員（運営委員）
弘田　真基	京都市立久世中学校教諭
梅田　遼平	京都市立洛南中学校教諭
豊田沙和子	京都市立嵯峨中学校教諭
英　　桃子	京都市立加茂川中学校教諭
山口　哲平	京都市立大枝中学校教諭
村田　実奈	京都市立朱雀中学校教諭
藤本　裕之	京都市立下京中学校教諭
松本　和久	京丹波町教育委員会教育長（顧問）
西田　三郎	京都府立林業大学校職員（顧問）
宮田　　功	京都市教育委員会学校指導課統括首席指導主事（顧問）
野村　啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
下村　幸児	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
法谷　道哉	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

（２）選考基準

・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
　　（正しい認識・理解の視点）
・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
　　（主体的な態度・関心・意欲の視点）
・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
　　（将来への展望の視点）
・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
　　（啓発資料としての価値の視点）

第19回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

応募校数：１８校　応募作品数：１，１０９点

氏　　名	学　校　名	学　年
最優秀賞（京都府知事賞）		
大沢　拓斗	南丹市立殿田中学校	２年
最優秀賞（京都市長賞）		
藤田　紬希	京都市立二条中学校	２年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
吉田　太陽	南丹市立園部中学校	２年
優秀賞（京都市教育長賞）		
小玉すみれ	京都市立西ノ京中学校	３年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
菅本　美空	南丹市立殿田中学校	２年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
最田　千尋	京都市立開晴小中学校	７年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
堀内　唯愛	舞鶴市立白糸中学校	２年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
小嶌　理紗	京都市立加茂川中学校	１年
優秀賞（京都新聞賞）		
塩見　　新	南丹市立園部中学校	２年
優秀賞（京都新聞賞）		
水上　桜聡	京都市立音羽中学校	３年
優秀賞（ＫＢＳ京都賞）		
西垣　裕惺	京丹波町立蒲生野中学校	２年
優秀賞（ＫＢＳ京都賞）		
谷口　俊太	京都市立下京中学校	１年

※　氏名等には原則として常用漢字を使用しています。

※　京都市立開晴小中学校及び亀岡市立育親学園は9年制で表示しています。

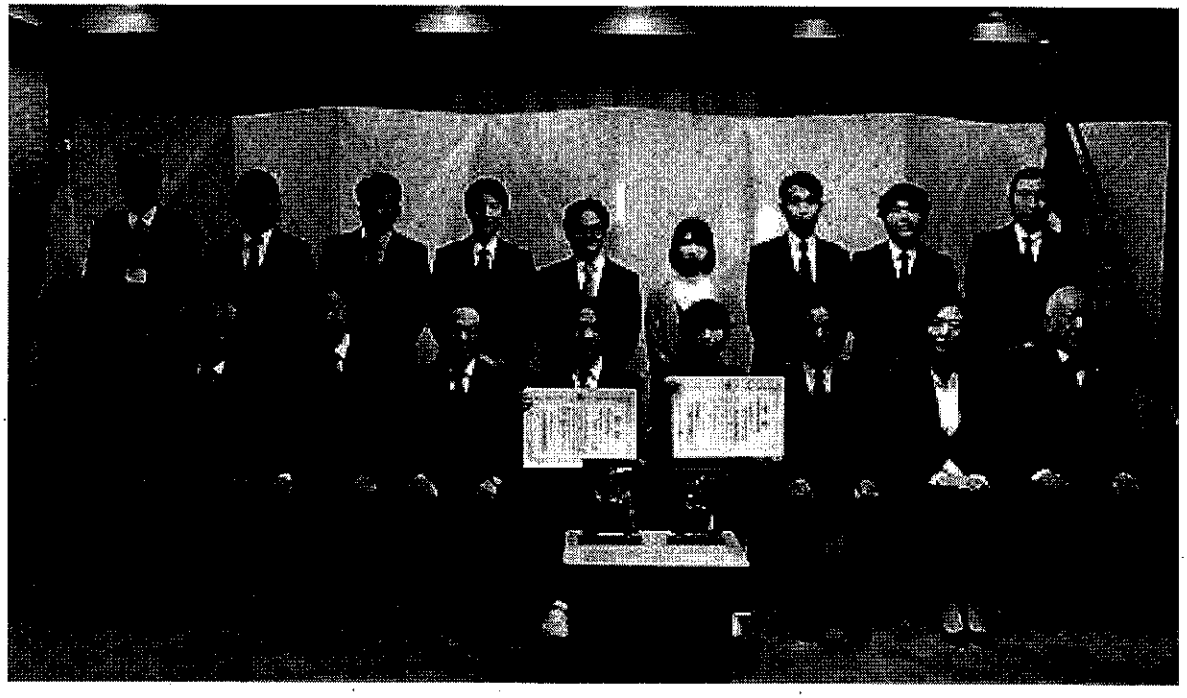
第19回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏　　名	学　校　名	学　年
佳作	小川あんじ	井手町立泉ヶ丘中学校	1年
	小林　賢太	亀岡市立育親学園	8年
	山口みそら	京丹波町立和知中学校	3年
	近藤　寧音	京都府立木津高等学校	3年
	湊　　楓華	京都府立須知高等学校	1年
	香月　彩花	京都市立開睛小中学校	7年
	青田　　栞	京都市立洛南中学校	2年
	藤田あさぎ	京都市立下京中学校	1年
	西澤　佐保	京都市立久世中学校	1年
	三浦　克仁	京都市立嵯峨中学校	1年
入選	阪本こころ	南丹市立園部中学校	2年
	大石　雪乃	南丹市立殿田中学校	2年
	田端　大祐	京丹波町立蒲生野中学校	2年
	山本康太郎	京丹波町立蒲生野中学校	2年
	吉田　羽菜	舞鶴市立白糸中学校	2年
	今宿　陽翔	京都市立下京中学校	1年
	山田　陽愛	京都市立久世中学校	1年
	八木　　優	京都市立嵯峨中学校	1年
	山本　脩太	京都市立嵯峨中学校	1年
	山内　美旺	京都市立加茂川中学校	1年

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

令和７年１月15日　京都府庁



西脇隆俊京都府知事、前川明範京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育長賞の授賞式

令和７年１月20日　京都市役所



松井孝治京都市長、稲田新吾京都市教育長から賞状が授与されました。

京都府北方領土教育者会議について

1　設　　立　　平成18年3月

2　設立趣旨　　北方領土問題の解決のために次代を担う青少年が北方領土について関心を持ち、正しい理解を深めるために教育関係者の会を結成して諸活動を行う。

3　会　　員　　京都府内の中学校・高等学校教員等

4　主な取組　　○「北方領土と私たち」作文コンクールの実施(平成18年度～)
○北方領土教育実践推進校指定事業の実施
・2校（活動支援経費10万円、授業公開、作文コンクールへの応募、教材研究、講演会等）
○各種研修会等への教員・生徒の派遣
・四島交流事業（ビザなし交流）…休止中
・現地視察事業…生徒、教職員、教育委員会関係者
・近畿ブロック研修会…近畿各府県
○北方領土に関する全国スピーチコンテストへの応募　等

5　組織体制　　会長（1）　副会長（1）　事務局長（1）　事務局次長（1）
運営委員（若干名）

＜北方領土に関する全国スピーチコンテスト入賞者（入賞は全国で10名）＞

年　度	受賞名	氏　名	学校名
平成25	奨励賞	岡嶋良太郎	京都市立伏見中学校
平成26	北対協理事長賞	花阪　大輝	京都府立園部高等学校附属中学校
平成28	審査員特別賞	高屋　瞳華	南丹市立園部中学校
平成29	奨励賞	藤内　空菜	南丹市立園部中学校
令和元	審査員特別賞	上山　莉奈	南丹市立園部中学校
令和2	北対協理事長賞	日下部佳子	南丹市立園部中学校
	奨励賞	河原　奈那	南丹市立園部中学校
	奨励賞	山下　青葉	向日市立寺戸中学校
令和3	審査員特別賞	八木梓緒音	南丹市立園部中学校
	審査員特別賞	岸本まりな	亀岡市立亀岡川東学園
	奨励賞	久保田美優	南丹市立園部中学校
	奨励賞	田中　珠生	京都市立下京中学校
令和4	奨励賞	加藤　心菜	南丹市立園部中学校
	奨励賞	山口　采乃	南丹市立殿田中学校
	奨励賞	辻本　美玖	南丹市立園部中学校
令和5	北対協理事長賞	楓　　るり	南丹市立殿田中学校
	奨励賞	田中　　周	京都市立下京中学校

京都府北方領土教育者会議の取組状況

1　「北方領土と私たち」作文コンクールへの応募校数・応募作品数

第１回	２０校	４０４点
第２回	２５校	８９５点
第３回	３３校	１，９３８点
第４回	２０校	１，３０４点
第５回	２４校	１，９７９点
第６回	１５校	１，４８１点
第７回	１８校	１，４３０点
第８回	１８校	１，７４０点
第９回	１８校	１，５４５点
第10回	２２校	１，４７１点

第11回	１８校	１，３０２点
第12回	２４校	１，４４８点
第13回	２１校	１，５９１点
第14回	２１校	１，５１１点
第15回	２３校	１，４２９点
第16回	２２校	１，７１５点
第17回	２１校	１，６１４点
第18回	１６校	１，０４０点
第19回	１８校	１，１０９点

2　各種研修会への参加状況　　（参加者実績：教員数＋生徒数）

年度	北方四島交流	教育指導者研修（根室市）	青少年等視察研修（根室地域）	近畿ブロック研修会（６府県）
平24	国後３	2		17（滋賀）
25		2	28	43（京都）
26		2		22（大阪）
27	国後２、択捉１	2	20	18（兵庫）
28		2		9（奈良）
29		2		18（和歌山）
30	択捉１	2	20	14（滋賀）
令１		2		48（京都）
2	新型コロナウイルス感染症のため中止			
3	新型コロナウイルス感染症のため中止			4（兵庫）ｵﾝﾗｲﾝ
4	未実施	未実施	23	15（奈良）
5	未実施	2		9（和歌山）
6	未実施	指導主事１	25	11（滋賀）

3　実践推進校事業指定校

年度	学校名
平成19	園部高校
	八条中学校
20	園部高校
	伏見中学校
21	園部高校
	大枝中学校
22	東輝中学校
	山科中学校
23	東輝中学校
	嵯峨中学校
24	日置中学校
	西賀茂中学校

年度	学校名
25	南桑中学校
	烏丸中学校
26	城北中学校
	中京中学校
27	和知中学校
	上京中学校
28	蒲生野中学校
	梅津中学校
29	園部中学校
	北野中学校
30	殿田中学校
	桂川中学校

年度	学校名
令和１	亀岡川東学園
	双ケ丘中学校
2	八木中学校
	開晴小中学校
3	瑞穂中学校
	久世中学校
4	殿田中学校
	二条中学校
5	白糸中学校
	京都御池中学校
6	亀岡育親学園
	加茂川中学校

入賞作文

最優秀賞（京都府知事賞）

自分事

南丹市立殿田中学校
二年　大沢　拓斗

「故郷に帰りたい。」この言葉に心が大きく揺れた。北方領土青少年等現地視察事業で根室に行ったときに聞いた、元島民鈴木咲子さんの言葉だ。

一九四五年八月九日。北方四島がソ連軍によって不法占拠された。やがて島民は船に乗せられ強制送還された。雑に扱われ、まともにご飯も食べさせてもらえない。そんな日々が続いた。

「もっと知ってほしい。関心・興味をもっと持ってほしい。」鈴木さんの痛切な願いだった。でも、令和六年一月に内閣府広報室から出された「北方領土問題に関する世論調査」の概要を見ると、北方領土返還運動に参加することについてどのように思うのかについて、「積極的に参加したい」が一・五%であったのに対して、「あまり参加しようと思わない」が五八・一%と、過半数を占めていることがわかった。しかも「絶対に参加したくない」という人の割合が四・三%もあったのだ。ロシアとウクライナの戦争状況の長期化により、日本とロシアの関係性は冷え切ってしまっている。はらわたがちぎれるほどの悲しく辛い思いを「断腸の思い」というが、その言葉を選択されるほどの無念を元島民の方々は感じているのに、同じ時間を生きる日本の人達の意識の実態がこうだった。この結果を、鈴木さんをはじめ、元島民の方々はどのように受け止められたのだろう。私自身も、現地視察事業に参加するまでは深く考えてこなかった一人だ。だからこそ、鈴木さんの言葉、願いが深く胸に突き刺さっている。

「他人事」でなく「自分事」として問題を捉えなければならない。そう強く思ったのは、返還運動に参加したくない人の理由が「自分が参加しても北方領土が返還されるとは思えないから。」というものだったからだ。私は、かつて友人との関係が上手くいかず、悩んでいる時期があった。一人で抱え込んでしまう癖がある私は、悩んでも解決策が見つからず、毎日学校に行くのが苦痛だった。誰かに相談しても、どうせ他人事にされるだろうと思っていた。が、別の友人に相談してみると、実に親身になって話を聞き、先生に相談するときも同伴してくれ、今では上手くいってなかった友人との仲も修復している。自分が悩んでいることに寄り添ってくれる存在、自分の事のように考えてくれる存在がどれほどありがたいものなのかを、私は知っている。だからこそ、「他人事」でなく「自分事」なのだ。

「北方領土問題を一緒に考えてほしい。」この思いを形にするため、この夏、共に研修を受けた仲間とともにクラスで報告会をした。どれぐらい受け止めてくれるのか心配したが、みんな集中して話を聴き、私たちの問いかけに真剣に考えてくれた。北方領土問題のこと、そして、鈴木さんをはじめとする多くの元島民の方々の「島に帰りたい」という思いを仲間に渡せたのかもしれない。私は、これからもこの活動を広げていく。仲間から学校へ。学校から地域へ。さらに多くの人達に「自分事」としての北方領土問題を広げ、伝えていきたい。

最優秀賞（京都市長賞）

思いで「かえる」四島

京都市立二条中学校
二年　藤田　紬希

私が北方領土について知ったのは小学校の時。領土問題についての授業でのことだった。初めは、授業の内容として覚えているぐらいの知識しかなかった。だが、インターネットで北方領土についてまとめた動画を見ているうちに自分なりの考えを持つようになっていった。当時の私は動画やニュース記事を見て、「二島返還だけでも良いのではないか」なんて考えていたりした。

しかしこの夏、私は根室を訪れ、元島民の方の話を聞くことでこの考えを大きく改めることになった。択捉島の元島民である鈴木さんは当時の択捉島のこと、自身の考えのほかにビザなし交流の時のことを話してくださった。ビザなし交流では、現在そこに住んでいるロシア人の家にホームステイのような形で訪れることが出来たそう。鈴木さんの訪れた家は青年とその母親が住んでいた。青年は鈴木さんに尋ねた。

「今住んでいる自分たちを憎んではいないか？」

それに対し、鈴木さんは正直な気持ちを話した。

「四十三年ぶりに来たら家がなくなってしまっている。祖先の墓も粗末に扱われ、悲しい。」と。

現在の島には元島民の家は残っておらず、墓も壊されたり、家の土台として使われていたのだ。鈴木さんの気持ちを聞いた五十歳代ほどの母親がボロボロと涙を流しながら、

「私たちの代がしたことではないが、本当に恥ずかしいことだ。」

そう話した。鈴木さんはこの親子の姿を見て、ロシア人への敵対心が薄れたそうだ。この時から、「四島を取り戻す」だけでなく「島でロシア人と共存」という道があってもいいのではないかという大きな気持ちの変化がおきたそう。

この話を聞いて、「思い」には人を変える大きな力があるのだと私は感じた。鈴木さんが島に住むロシア人の思いを知って考えが大きく変わったように、私も四島返還に対する思いが変わった。

鈴木さんは

「何が何でも話し合いで、互いが納得する形で解決しなければならない。」

と何度も話された。北方四島は鈴木さんたち元島民の故郷であり、同時にロシア人の故郷でもある。話し合いの場やビザなし交流がない今、お互いの思いを知ることも伝えることもできない。これでは平和な解決を実現させることが出来ないのだ。

私は鈴木さんの話を聞いて「四島返還」と「共存」の重要性についての認識を大きく改めた。

まず「四島返還」について。これが一番大きく考えの変わったことだ。今までは領海や国境をはっきりさせることができ、最も実現が早い「二島返還」が最適策だと思っていた。だがこの考えは国に最速でもたらされる利益だけを考えた結果の考えだった。その二島に含まれない場所にも多くの人の家が存在し、思い出が詰まっていることを身に染みて感じた今なら、「四島返還」の重要性がわかる。そして、新しく知った「共存」という未来。反対する人も多く、課題も多いが同じ故郷を持つ人々が悲しい思いで終わらないためにも必要な道だと私は考える。

両国の人々がこの問題に対する思いを持ち、伝え合えたらこの現状は「変える」ことが出来る。元島民の人たちが「帰る」ことが叶う。今一度、この問題に対して自分なりの考えを持ってみてほしい。一人ひとりの思いが北方四島の未来を変えることが出来るから。

●優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

今もなお癒えない傷

南丹市立園部中学校
二年　吉田　太陽

戦争は私たちからすべてを奪う。人が人でなくなってしまう。でもそれが日常になってしまう。心に癒えない傷を作り、約八十年の時が経過した今も、悲惨な記憶と戦う人が多くいる。

私の曽祖父は戦争を経験した。戦争中、生活の拠点を満州に移し、懸命に汗を流し家族のためにその日を生き抜くために働いた。でも日本は戦争に負けた。生活が一変し、ロシア人に捕虜として捕まった。いわゆるシベリア抑留だ。収容所では、満州からだけではなく北方領土から送られてきて、ともに働く人もいたと聞いた。曽祖父は奇跡が重なり、海を越え故郷に帰ることができた。だから私は今ここにいる。そのことに心から感謝している。でも北方領土から強制送還された方はどうなのだろうか。きっと、自分の故郷に帰ることが叶わなかった人もいたのではないだろうか。

今年の夏休み、私は数人の仲間とともに北海道根室地域を訪れた。現地視察事業に参加することができたからだ。実際にその地に足を運び、目で見ることでどれほど問題解決が困難であるのか、深い闇を抱えているのかを感じることができた。

視察を通じて元島民の方のお話を聞いた。戦後すぐにソ連の軍事侵攻により故郷を奪われたことは、視察に行く前に授業で学習していた。きっとこの方は、ロシアに対する恨みを相当持っているに違いないと思っていた。しかし、実際には数年間に及ぶ共同生活があり、心が通う瞬間もあったと聞いて驚いた。

「今、北方領土に住んでいるロシア人にとって、私たちと同じように島を故郷だと思っているはず。だから奪い返そうなんて思わないけれど。」

元島民の方が言葉を詰まらせたのは、先祖のお墓についてだった。何よりも悔しいのは、北方領土に住めないことではなくて、お墓参りができないこと。墓前で手を合わせられないこと。納沙布岬からすぐそこにあるはずのお墓の世話をできない辛さ。私たちには簡単に理解できない感情だ。しかし、実際に苦しみ、今もなおその現状に苦しんでいる人に出会った。歴史を正しく学ぶことの重要性、人の想いに気づくことの大切さを知った。

帰途につく際、私が感じ得た知識と体験を広めていくことの重要性を痛感した。京都に帰り、社会科の先生に「自分たちにできること」に挑戦したいことを提案した。その結果、同じく視察事業に参加した仲間とともに、学年集会で視察を通して得た知識や経験を発信する機会を得た。中学生などの若い世代がこの問題に関心を持ち、未来に向けて何ができるのかを考える必要性を実感したからだ。

視察中に出会った元島民の方たちや地域の人々の想いを知り、単なる歴史の一部ではなく、自分自身が関与する問題としてみんなで真剣に考えた。北方領土問題の解決は、まずは対話をすることから始まるのではないだろうかと、ふと感じた。

この問題の解決は、私たち一人一人の手に委ねられている。自分たちが発信者として引き続き学び、考え続ける決意を新たにした。これからも北海道の美しい海と大地、そして、その背後にある歴史や文化を尊重しつつ、返還が実現する日に向けて自分にもできることを実践していきたい。すべての人の目には見えない傷が癒える日を祈って。

優秀賞（京都市教育長賞）

北方領土問題解決のために

京都市立西ノ京中学校
三年　小玉すみれ

私は今年の夏、北方領土青少年等現地視察事業で北海道を訪れた。参加した理由は興味本位だったが、新たな発見が多くある貴重な体験となった。

初日、中標津町長の西村さんにお話を伺った。領土問題解決には、日本とロシアの相互理解が必要不可欠だと仰ったのが印象的だった。

二日目、択捉島蘂取村の元住民、鈴木さんにご講話を頂いた。知識としては知っていた強制送還のことだったが、経験したご本人の言葉で聞くとその過酷さに圧倒された。樺太の収容所で亡くなった幼なじみを偲び頬を濡らす鈴木さんの姿に胸が痛んだ。同時に、元島民が旧ソ連やロシアに恨みを抱くのは当たり前に思えた。しかし、後の質疑応答の一幕で鈴木さんは仰った。

「ロシアという国への所望はあっても、ロシア人に対して憎しみは持っていません。」

そう言い切れるのは、ビザなし交流で共住した経験からだという。一緒に住んだロシア人が、領土問題について「本当に恥ずかしいことをしました。」とぼろぼろと泣く姿を見た時、鈴木さんの中で敵対心が消えたそうだ。

この話は私にとって目から鱗で、両国の立場に立った多角的な視点を持つきっかけになった。今まで自分が、国としてのロシア、現在、北方領土に住んでいるロシア人を含め、それらを漠然と「悪」としていたと気づいたからだ。だが自分たちの代ではなくとも、領土問題に対して罪の意識を持ち、日本人を想って涙を流すロシア人は確かに存在する。彼らは私たちと同じように、問題を痛みをもって受け止め、共に未来を考えようとしている。

国民一人ひとりがこの事実を知ることが、北方領土問題解決の鍵になるのではないかと私は考える。西村さんが仰った相互理解は、まず国と個人を区別しないと成し得ないと思う。現状、ニュースなどでは日露関係の視点からでしか北方領土問題を捉えられず、情報も限られている。また中学校の教科書学習では、北方四島の名称や現状、領土権の変遷を暗記するだけで終わってしまう。このままではそもそも、問題自体に興味を持ちにくい。幼いころから問題を身近に感じさせる取り組みを全国で行うべきだ。

例えば、私の地域には小学生の登下校を見守ってくださるボランティアの方がたくさんいる。その方々が使う交通安全旗を、北方四島交流センターが配布する返還運動の旗に変えてみてはどうか。既に「交通安全」と書かれており、布地も黄色で目立つ。または、そのような旗を新しく作るのも良いかもしれない。いずれにせよ小学生は毎日目にする物なので、自然と北方領土が意識に蓄積されるだろう。将来、領土問題を考えるきっかけに成り得ると思う。

領土問題の背後にある人々の苦しみは単なる歴史の一部ではなく、個々の人生に深く刻まれた現実だ。両国民はそれを理解した上で固定観念を持たず、相手国民を理解する姿勢を持つことが求められている。国民が強い意志をもったうえで、国同士が話し合いを続ければ、必ず道は開けるはずだ。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

関心があることから道は切り開かれる

南丹市立殿田中学校
二年　菅本　美空

「関心があることから道は切り開かれていく。」北方領土という故郷を奪われた元島民の鈴木咲子さんから、現地視察事業で根室を訪れた私たち中学生に向けられたメッセージだ。大切な居場所を奪われた鈴木さんは、一体どのような思いで私たちにこのメッセージを伝えたのだろうか。

一九四五年にソ連軍が北方領土を占領した時、鈴木さんはまだ小学生だった。ソ連軍は父が大切にしていた懐中時計や母の指輪を奪っていった。家族の着物や晴れ着はいつの間にか食べ物にかわり、両親や姉は強制労働に行かされたりもした。やがて北方領土から樺太へ強制送還され、ろくな食べ物もない極寒の収容所に無理やり入れられ、大勢の方々が亡くなられたそうだ。人は本来、対等な立場であるはずだ。それなのに人としての扱いを受けず、恐怖の中で命を落としていった方々がいる。私にとって、この事実は現実とほど遠く、マンガやアニメだけの世界だと思っていた。毎日当たり前に家に帰り、家族と話しながらお腹一杯になるまでご飯を食べ、温かい布団で眠っている。そんな私には故郷を追い出された元島民の方々の思いを完全に理解することはできない。だからこそ、一生懸命自分事として捉え、考えることが大切だと思った。

私はもっと多くの人にこのことを知ってほしいと思い、姉と兄に話をした。二十二歳の姉は島の位置さえも覚えていなかった。北方領土問題に関する学習は小中学校で少し触れるだけで普通ならそれ以上関わることがない。次第に忘れて行ってしまうことにも納得がいく。一方、兄はこの問題がどのようなものなのかは覚えていたが、元島民が具体的にどのようなことをされ、どんな思いだったのかまでは知らなかった。でも、どちらも私が学んだ北方領土や鈴木さんの話をすると驚いたり関心を示してたりくれた。特に兄とはどうすれば問題が解決できるのかについて、話し合うこともできた。「普段の生活や学校の授業では深く知ることができないから、こういう話をすることは大切だ」とも兄は話してくれた。私は、自分が故郷を奪われた訳ではないけれど、家族が北方領土問題について関心を向けてくれたことがとても嬉しかった。ほんの些細なことではあるが自分が行動を起こすことで少しでも北方問題解決に近づくことができたのではないかと感じたし、問題に関心を持ち、一緒に考えてくれる人を増やせたことが心から嬉しかった。私にとって、この問題は国や他人のことでなく、自分の問題に変わっていったのだ。

今、改めて鈴木さんの言葉が胸に響く。一人でも関心を持つことで、ほんの少しかもしれないが北方領土問題解決に近づくことを私は確信している。元島民の方々が経験されたことも、その思いも私たちが次の世代へつないでいく。そして、一人でも多くの人が北方領土に関心を持つことで、私たちの手で故郷への道を切り開いていく。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

忘れえぬ故郷

京都市立開晴小中学校
七年　最田　千尋

私が北方領土について考えるようになったきっかけは、五月に母と、広島に平和学習に行ったことだ。

このとき、原爆ドームや広島平和記念資料館、大和ミュージアムなどを巡ったことで、自分と同じくらいの年齢の子供たちがたくさん亡くなったということを知り、戦争は単なる歴史上の出来事ではなく、時代が違えば、自分も当事者になっていたかもしれないと考えるようになった。それから、第二次世界大戦について調べる中で、北方領土問題を知った。

この作文を書くにあたって、より詳しく北方領土のことを調べてみると、自分が想像していた何倍も深くて悲しい現実が、そこにはあった。

元島民の方々のインタビューを見て、愛する故郷や大切な人の命をソ連軍に奪われたと知った。ソ連軍に故郷を占拠され、四島からの強制引き揚げ命令が出されたときの悔しさや悲しみは、私たちには想像もできない。考えられないほどの不安が続く中、知らない場所で狭い部屋にぎゅうぎゅう詰め、暖房も上着もなく、毎日、人が亡くなっていく生活だ。

「占拠」というたった二文字の言葉の中には、このような悲惨な出来事が数限りなくあるのだ。自分がその立場だったら、と考えると胸がとても痛くなる。

一九九一年四月のゴルバチョフ大統領来日の際に、日本国民と北方四島在住ソ連人のビザなし交流が提案された。そして、ビザなし交流は、一九九二年から始まり、お墓参りや文化交流など、元島民の方々にとっても貴重な場となっていた。

しかし、近年、コロナ禍や、ロシアによるウクライナ侵攻に対する日本の制裁措置への反発から、ただでさえ少ない故郷への訪問ができなくなっている。この現状に元島民の方々はどのような気持ちでいるのだろうか。元島民の方々の平均年齢は今年で八十八歳となる。元島民の得能さんは、「もう二度と故郷に、北方四島に行けないかも。」と思うことがあるそうだ。戦争と政治に振り回され、愛する故郷へさえも自由に帰れないというのは、本当に気の毒だと思う。

この作文を書くことを母に伝えると、「お母さんが子供のころは、よくテレビで北方領土問題が放送されていた。でも、最近はあまり見かけない。日本人の関心も薄れているし、ロシアとウクライナが戦争中だから交渉のしようがないんだろうね。」と言っていた。この戦争により、日露の関係に亀裂が入っている。ソ連軍に北方四島を占拠されてから七十九年たった。もちろん北方四島を故郷とするロシアの人々もいる。北方四島は、どちらにとっても大切な故郷だ。今、私たちがするべきことは、関係が遮断された中で、お互いをつなぐ大切な〝何か〟を見つけることだと思う。その〝何か〟が、どんなものかわからない。北方四島に住んでいるロシアの人々と元島民の人々は、それぞれ故郷に対する思いをもっている。二つの国がつながれる〝何か〟が、きっとあるはずだ。

私は、お互いがお互いの境遇を理解しあい、双方が平和になることを願っている。しかし、平和を望むだけでなく、元島民の方々がソ連軍に故郷を奪われ、つらい思いをしたことを忘れずに、これからも語り継いでいきたい。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

お互いがお互いを

舞鶴市立白糸中学校
二年　堀内　唯愛

私たちは、社会の授業で北方領土問題について学びました。私自身、北方領土問題は小学生のころにあるテレビ番組で少しだけ観たことがあります。ただそこでは「たかが島にそこまでこだわるのか」と考えていました。その時はそのまま興味もなく番組をアニメに替えました。

白糸中学校では、十一月に北方領土問題を習いました。そこでは、これまでの条約で千島列島はロシアのものになったという記述はありますが、北方領土は一度も日本以外のものになったことはないと様々な条約を見て学びました。ではどうしてロシア人が住んでいるのだろう、という疑問に対しての動画を授業内で学びました。その動画の内容は北方領土に住む多くのロシア人の発言を短くまとめたものです。動画の中のロシア人は「ここはロシアの領土よ。出ていくなんて考えられない。」やそれと似たようなことを発言していました。ここで私は一つの疑問が浮かび上がりました。それは私たち日本人とロシア人で、歴史の内容が異なっているのではないかということです。私たち日本人は日本語での条約を教わり、日本側から見た歴史だけを学び、常に被害者であり続けました。ロシアでの教育ではどこかの条約で北方領土はロシアのものになり、そこからは北方領土はロシア領と教わっているのではないかという考えが出てきました。私がこのような考え方ができるようになったのは、北方領土問題について習った時期とほぼ同時期に行われ始めた、白糸中学校ならではのホットハートプロジェクトによるものです。このプロジェクトがなかったら、私は北方領土に住むロシア人に対して強い敵対心を持ち、ロシア人を勝手に嫌い、何が事実かわからないままに否定し続けたと思います。ホットハートプロジェクトがあることで、様々な視点から自分と全く違う考えを持つ人を理解し、否定せず納得することに心がけられるようになりました。だからこそ、私たち日本人からは見えないロシア側の考えにも興味を持てるようになりました。

今回、私の考えはロシア人の発言動画とホットハートプロジェクトによる二つのものから構成しましたが、そこで感じたことがあります。それは「言語、受け取り方、歴史の違い、互いの国の教え方で未来ある子どもに本当かわからないことを教えている」ということです。すべてのことについて理解しあえていないところも多くあると考えます。最後の「嘘か本当かわからないことを教えている」というのは日本人としては、日本の教えが正しく、ロシア人としてはロシアの教えが正しいからです。国際会議の時は、お互いの歴史の見直しを行ってはどうでしょうか。そしてお互いに会議を今よりも大切に考えてはどうでしょうか。

私の予想ですが、どちらかが北方領土をあきらめることで、必ず悲しい想いをしてしまう人が生まれてしまうということです。日本人にもロシア人にも、北方領土を故郷として今を生きている人たちがいます。日本が北方領土問題について諦めることで元島民が悲しみ、ロシアが諦めた時は現島民が悲しみます。その双方の気持ちをどのように大切にしていくのか、それがこれからの問題解決にとって最も大切なことではないかと考えます。

これから私たちはこの問題を忘れない、どこかで悲しんでいる人がいるということを覚えているという小さなことしかできないかもしれません。大きく関わることができる人がいるのかもしれません。ですがどの立場に立っても、「忘れない」というほんの小さなことを、日本中のみんなが意識していくことができるのなら、いつか誰かの心の支えになることができると私は信じています。この気持ちがこれから揺るぐことなく、強い心をもってこれから生きていきたいです。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土の過去と今を考える

京都市立加茂川中学校
一年　小嶌　理紗

私は、今回、北方領土のことを知るために、資料を読んだり、舞鶴に住む祖父に話を聞いたりしました。

「領土」とは、国家が支配する統治権をもつ陸地という意味で、それは他国との条約で決まります。ロシア（当時はソビエト連邦という国でした）とは、一八五五年二月に日魯通好条約で、択捉島とウルップ島の間に国境が確認されています。千島列島や樺太は、日露戦争や第二次世界大戦で、日本の領土になったり、他国の領土になったりしましたが、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、歴史上一度も他国の領土になっていないことが分かります。

では、なぜ「北方領土問題」になっているかというと、ソビエト連邦が、一九四五年二月にヤルタ協定（日本は参加していない）で、北方領土はソビエト連邦のものになった、と主張し、一九四五年八月にソビエト連邦が武力で占領して以降、国名がロシアになった今も不法に占拠しているからです。

そして、日本の政府は領土問題が解決するまで、国民に北方領土へ行かないようにと言っています。これは、北方四島に日本人が行くと、ロシアが「入国を許可する」というように、あたかも統治権をロシアが持っているようなふるまいをされるからです。私はお盆に舞鶴へ墓参りに行きましたが、一九四五年まで北方四島に住んでいた人は、それができないわけです。

ソビエト連邦は、一九四五年に千島列島や樺太に加え、朝鮮半島や満州と呼ばれていた、当時、日本の領土だった場所を武力占領するときに、捕まえた大人を捕虜として、シベリアなどにある収容所に入れ、強制労働させたそうです。

祖父によると、捕虜になった人たちは、一九四九年までに舞鶴に船で帰国されたそうですが、戦争が終わってから財産を失い、とても寒い中で働かされ、死んでしまう怖さにあい、やっと日本に帰ってこれた大人たちは、本当にかわいそうだと思いました。

北方領土問題が起こってから、約八十年がたちました。八十年里帰りできていない人がいる一方で、八十年住んでいるロシア人がいて、どちらにとっても北方領土がふるさとになっています。難しい問題ですが、政府は、ロシアがウクライナと戦争をして土地を武力で占領している今、北方領土も過去に起きた同じ問題だ、と声を上げることが大事だと考えました。そして、ただ、声を上げるだけではありません。例えば、ロシアは、日本が使っていた工場を使い、製紙業を行っていましたが、施設の老朽化で工場が使えなくなり、日本に経済協力を求めています。このような時に、「日本のものだから日本が直す」という事実をつくる実行力も大切だと考えます。

優秀賞（京都新聞賞）

北方領土問題の平和的解決に向けて

南丹市立園部中学校
二年　塩見　新

北方領土は北海道の北東に位置する島々だ。戦前は日本固有の領土だったが、今はロシアに不法占拠されている。私は社会科の授業で北方領土問題を知り、もっと知るために現地視察事業に参加した。

元島民の鈴木咲子さんは、択捉島の蘂取村に住んでおられたそうだ。でも、戦後ソ連人がやってきて金品や着物を奪っていき、三年ほど強制労働をさせられたり、わらの上に寝かされたりするような生活を強いられたそうだ。三年後には、小さな船に載せられ樺太の収容所へ連れて行かれ、そこでも人として扱われないような辛い暮らしをしてきたそうだ。日本の船が来て、樺太から引き上げるときには、「助かった」という思いが強かったとおっしゃっていた。写真や動画などではわかりにくい体験者の熱い思いを直に感じることができた。鈴木さんは最後に「北方領土が帰ってきたら、遊びに来てくださいね」とおっしゃった。この言葉から、鈴木さんがいつか必ず北方領土が返還される日がくることを信じていること、その日が早く来るように祈っていることを感じた。次世代に北方領土問題の解決に向けて行動してほしいと思っておられるのだと強く感じた。

また納沙布岬にある北方館の副館長さんの話を聞いて、北方領土の自然や、ロシアから侵略を受けた時の抵抗の歴史などを知ることができた。さらに漁業で昆布を取る時などには、一年間に何千万円ものお金をロシアに払って、収穫量はほんの少しだということを知った。私は怒りの感情が湧いてきた。なぜならソ連の侵略によって北方領土を奪われた上に、領海も奪われ、漁をするためにお金まで支払わなければならないなんて、なんて勝手なんだろうと感じたからだ。

北方領土問題はどうすれば解決できるのだろう。一番に言えることは「返せ！」という怒りの感情に任せてしまってはいけないということだ。日本が強制的に返還を行うと、それは過去にロシアが行ったことと同じことになってしまうからだ。そうではなくて、話し合いによって平和的に解決する必要がある。過去には共同経済活動という案も出ていたと授業で学習した。今現在、北方領土に住んでいるロシア人にとっては、北方領土が故郷になっている。お互いの考えを話し合い、歩み寄り、共存できるように考えていくことが大切だ。

また鈴木さんと副館長さんの話で共通していることは、北方領土のことを多くの人に知ってもらいたいという思いだ。より多くの人が北方領土問題を知り、関心を持つことが返還につながるだろう。私は研修で学んだことを多くの人に伝え、北方領土の返還に少しでも貢献したいと考えた。

研修から帰って、早速家族に見てきたことや聞いてきたことを話した。すると「なんで？」「どれくらい？」等の質問が返ってきた。私は答えることが難しかった。

私は当事者でないから、当時の詳しいことはわからない。まだまだ知らないことがたくさんある。今、私にできることは伝えることだと思ったが、さらに知ること学ぶことから始めなければならないと感じた。そうすることで、当時の様子を正しく伝えられるし、当事者の想いもより深く考えられるからだ。

だから、研修で学んで終わりにせず、調べ学習をし、周りの人に北方領土問題を伝え、関心を持ってもらえるように努力したい。

優秀賞（京都新聞賞）

これからの北方領土

京都市立音羽中学校
三年　水上　桜聡

小学三年生の時、北方領土が近くで見える北海道の根室という場所に行ったことがあります。そこからは、北方領土が水平線より手前に見え、とても近くにある島だということを感じました。その時の写真を見返していると、根室に「島を返せ」という黒い旗や、「呼び返そう。先祖が築いた北方領土」という言葉などがありました。昔、北方領土に住んでいた人は、今でも、訴え続けていることを改めて知りました。もし、自分が、故郷に一生帰ることができないとなると、喪失感を覚えると思います。自分の身になったとして考えると、ひどいことが起きていると実感し、一刻も早く北方領土を返して欲しいと毎日思い続けているだろうということが、想像できました。

ある日、ウクライナとロシアが戦争をしている時に、「ロシアからウクライナは、どんな見え方なのだろう」と、気になったことがありました。常にウクライナから見て、ロシアは上の方から攻めてきていると考えていたので逆の考え方をしてみたのです。

地図を、北極を下に逆さにしてロシアを中心に見えるようにすると、一気に見え方が変わりました。ロシアからウクライナの見え方もそうですが、それ以上にとってもびっくりしたことがありました。ロシアから見た日本が、方向が違うだけで、ウクライナと同じ状況であることが分かりました。普段、テレビや社会科の授業などでも地図を目にしますが、近い国といえば、中国や韓国を思い浮かべます。ロシアがこれほど近いということに気づきもしなかったのです。

このように考えていると、北方領土の問題と、これらが私の中で結び付いたように思えました。

北方領土に戻りたくて、今も訴え続けている人がいる。

今、ロシアとウクライナは戦時中で、ロシアがウクライナを攻めて始まった。

日本は、ロシアから見て、ウクライナと反対方向ではあるけど、位置が似ている。

このことは、ロシアが日本にいつ向いてくるか分からない、ということを示していると思いました。北方領土は、元は日本の領土であったのだから返して欲しい、とロシアに強く言うと、いつ矛先が日本に向いてくるか分かりません。

私たちは、この北方領土の問題に対して、領土を返して欲しいという考えを言い続けるべきか、日本の安全で平和な未来を守るためにこのまま何もしないべきか、を考えていく必要があると思います。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

世界が平和になるために

京丹波町立蒲生野中学校
二年　西垣　裕惺

二〇二二年二月二十四日に始まったウクライナとロシアの戦争。私は、この戦争はすぐに終わるものだと最初は思っていた。だが半年、一年と長く続く戦争に対して、不安やもっと大きな戦いへとなってしまうのではないかと日々感じている。私は今も世界のどこかでまた戦争が始まったと信じることができないでいる。

授業で北方領土についての話を聞いた時に、私はウクライナと北方領土は同じような状況であると感じた。自分の国も領土が奪われていると思い出し、ウクライナの事は他人事ではないと感じた。どちらもロシアによって今まで暮らしていた土地を奪われて住めなくなったり、未だに住んでいた場所に帰ることができていなかったりと同じような状況だと感じた。そして、ウクライナの一部も、北方領土と同じようにいつまでもロシアが不法に占拠し続けてしまうのではと不安に感じている。

もしも私がウクライナや北方領土の当事者だったらと考えてみる。まず最初に、先祖代々受け継いできた自分たちの故郷にこれからも住みたいから故郷を返してほしいと思う。そして、もうそういった争いを無くして、同じように帰りたくても帰れないという人や、大切な人を戦争で失ってしまう人がいなくなってほしいと思うだろう。だけど北方領土の場合には、ただ単に返してもらうだけでは、解決できない問題だと感じた。なぜかというと北方領土には今そこに住んでいるロシアの人々もいて、返してもらうだけでは、逆に北方領土に住んでいる人の故郷を奪ってしまう。それではまた、同じような戦争になってしまったり、ロシアの中にもお墓参りなどに行きたくても行けない人も出てくると思う。だからこそ、ただ返してもらうだけではあまり意味がないのではないかと感じた。

私たちはこのような問題に対して、直接何かすることはあまりできない。その中でもできることは、そのような問題を忘れずに考え続けることだと感じた。忘れずに考え続けるということは、今ウクライナや北方領土がどんな状況なのかを知ろうと思ったり、家族や友達と話し合うだけでも変わってくると思う。なぜかというと、いつまでもみんなが覚え続けることによって、戦争というものはいつの時代でも起こってしまうことであるからこそ、国と国、人と人とのつながりが大きな力になるとみんなが考え、それが繋がっていき世界が平和になっていくと感じた。一人一人を大切に、そして協力をすると、このような問題にならないと考えた。だからこそ、これから私はウクライナとロシアの戦争や、一人一人の大切さを忘れずに生きていきたい。

北方領土はこれまでもこれからも日本の大切な一部だ。私は北方領土が日本へと返還されるその日まで、このことについて考え、忘れずに生きていく。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

百聞は一見を処かずとも

京都市立下京中学校
一年　谷口　俊太

「近くて遠きもの」といえば何を思い浮かべるだろうか。僕は、北方四島であると思う。

僕が北方領土問題を意識したのは、兄の影響である。兄が北方領土問題について作文を書いていた。とても悩みながら書いていたことを覚えている。「それだけ悩む北方領土問題ってどんな問題なんやろう」と思ったことも覚えている。今、その時の兄と同じ立場だ。色々なことを知った今だからこそ、とても難解な問題であると痛感する。

北方四島は目と鼻の先にある。しかし、そこには約八十年たっても破れなかった壁がある。ただ、僕は、その壁を破るということは、少しずれた考え方なのではないかと思う。

もちろん、日本人の中に自分たちの故郷を不法に占領された人々がいることは間違いないことだ。しかし、今、北方四島が故郷であるというロシア人が多くいることも事実である。この状況で「ロシアは不当に占領している。だから、北方四島を返せ。」と主張し、北方四島が返還されることになったとしても、根本的な解決には至らない。同じように故郷を奪われたと感じるロシア人が生まれ、返還運動へ発展することが目に浮かぶ。故郷を不当に占領されるということの辛さをわかっている日本だからこそ、その様な事態は避けるべきであると思う。そういう壁が幾重にも重なり、北方領土問題の解決を妨げてきた。日本とロシアの両者が納得する解決策は、いまだに見出されていない。

解決策の一つとして、共存を目指すという手はどうだろうか。そこには、文化や言語の違いに関わる問題だけでなく、例えば「そこで生まれた資源はどちらの国のものになるのか」など、別の問題も生まれる。北方領土問題は、世界の歴史の中の大きな傷であるが、それを大きな進歩にもできるかは、私たち次第である。

これまで、北方領土問題について、考えてきたとはいえ、僕は「話を聞いた」「島や北方領土問題の背景を見た」「北方領土問題について、インターネットで調べた」というだけである。僕たちは、いわば読者でしかない。僕たちは、ソ連軍が侵入してきた時のことも、ソ連軍に家を占領される時のことも体験することはできない。そして、唯一、それを体験した元島民の人達も高齢化が進み、その人数は減少してきている。だからこそ、「知る」という努力だけでもしなければならない。

「百聞は一見に如かず」というが、「見る」ということができないこの問題の解決のためには、百聞でもしなければならないという精神で立ち向かわなければ、解決には至らないと思う。たとえ知ることしかできなかろうが、それだけでもいい。そんな一つの小さな行動は、必ず自分のために、誰かのために、世界のためになる。そう思える人が増え、知識や技術が進歩したその先にある明るい未来を、僕、そして元島民の人が見ることができればいいなと思う。

佳作

北方領土の明るい未来

井手町立泉ケ丘中学校
一年　小川あんじ

私が北方領土について考えようと思った理由は、テレビのニュース番組で北方領土に関わるニュースを見た時、北方領土とは日本の領土でありながら、ロシアが不法占拠しているところだと知り、なぜ日本の領土を占拠しているのかについて疑問に思ったからです。

北方領土について外務省と北方領土問題対策協会のホームページを使って調べてみました。調べてみると、北方領土問題は七十年以上もの間もめているそうで、北方領土を日本が治めることによって、日本と仲の良いアメリカが基地を造ったりすることをよく思わず、ロシアはなかなか返そうとしないのだということがわかりました。また、北方領土は今まで日本人しか定住したことのない地域であったことから、占拠されることによって、日本人が島に住めなくなったり、無理やり島から追い出される人が多くいるということがわかりました。そして現在でも、ロシアによる不法占拠は続いており、日本の領土でありながら日本人が一人も住んでいない状況になっています。

私は、北方領土について調べてみて、北方領土がロシアのものになってしまうと、日本の人々の生活にも支障が出てしまうのだと考えました。なぜかというと、占拠されることによって故郷から離れる人もいれば、居場所を失う人もいるからです。それだけでなく、島を失うと排他的経済水域が狭くなることによって北方領土に住む人々だけでなく、日本全体にも問題が出てくると思います。

北方領土の今の状況を調べてみて、ロシアと日本でそれぞれに理解しあわなければ解決できないような問題なのだとわかりました。だからと言って、国同士の問題だからあまり自分たちには関係ないのだと捉えるのではなく、自分たちにも大きく関わることなのだと理解して、北方領土問題にしっかり向き合って、まずは北方領土問題について知ることが大切だと思います。戦後七十九年を経過してもなお解決しない北方領土問題に対して、学校で学ぶこと以外にもう少し詳しく調べて、この問題についてもっと自分も目を向けていきたいと思いました。

佳作

北方領土について

亀岡市立育親学園
八年　小林　賢太

僕が、一番最初に北方領土問題を学んだのは、小学五年生くらいの時です。習ったときは、まだどんな問題かを詳しく理解できていなくてあまり関心もないままでした。けれど八年生になり、友達が北方領土の近くに行くので調べてみました。

五年生の時は、北方領土は日本の領土で戦争中にロシアに取られたということぐらいしか知りませんでした。当時は「ロシアはなぜ占領するのかな？返してほしいけどこんなに小さな島だからもうあきらめてるのかな？」と思っていました。けれど調べてみると、北方領土の全島を合わせると面積は約五千平方キロメートルで福岡県や千葉県と同じ、もしくはそれより大きいことを知ってすごく驚きました。北方領土の島、択捉島は日本最北端の島で、排他的経済水域が広く、漁業も盛んです。北方領土は水産物が豊富でサケ、マス、タラバガニ、それに昆布採取業などがあげられます。それに昭和十四年から昭和十六年までの三か年平均で約五千六百万貫（一貫は三、七五キログラム）当時の金額で約五千二百万円で、北海道全域の二十三％も占めていたのです。そう考えるとますますすごく大事な日本の島だと思いませんか？それに北方領土は一度も他の国の領土になったことはなく、正真正銘のわが国固有の領土だと僕は思います。日本人が苦労して開拓した島を占領して、一万七千二百九十一人もの島民が故郷を追われるなんておかしいし、あってはならないことだと思います。

そこで僕たちにできることは何かと考えた時に、重要なことは政府と国民が一丸となって情報発信していく、日本の領土だということをもっとアピールすることが大切だと思いました。故郷を追われた元島民の方の平均年齢は八十八歳を超えています。北方領土問題は、北海道だけの問題ではないのです。日本国民、特に次世代を担う若い世代の方に関心と理解を持ってもらうことが大切だと思いました。そのためには、ＳＮＳをはじめとした情報発信をしていけばよいと思いました。日本国民が想いを一つにして北方領土返還を強く願うことが、今後の外交交渉を後押しする大きな力になると思いました。

やはり、北方領土は日本にとってなくてはならないものだし、故郷を追われた人が一万七千二百九十一人もいて、とても深刻な問題です。全員が北方領土について関心と理解を持つだけでも変わっていくのかなと思います。最近では北方領土の日（二月七日）や八月「北方領土返還運動全国強調月間」等の取組、北方領土問題を情報発信する活動が広がっています。僕たちにできることは限られているかもしれませんが、同じ日本人として北方領土だけでなく、日本の領土問題に目を向け、未来を見つめなおしていきましょう。

佳作

北方領土のこれから

京丹波町立和知中学校
三年　山口みそら

皆さんは、北方領土問題を知っているだろうか。

私は以前から北方領土問題に興味があり、実際に北方領土に行ったことがある先生に話を聞いた。話を聞いた中では、今現地に住むロシアの方々は北方領土はロシアのものだと思っている、という話があった。この話が私の心に残り、さらに北方領土出身者の声を調べてみることにした。

北方領土は現在、ロシアが占領している。事の始まりは、第二次世界大戦中、中立条約を破ったロシアの侵攻だ。その後不法占拠したロシアによって、日本人島民一万七千人ほどが故郷の島を強制退去させられた。調べたサイトによると、元島民は持っていた家屋や船舶、財産のほとんどを放棄させられ、所持品も制限されて故郷の島を追われた、とあった。そして元島民の思いは叶わず、今でも自由に出入りできない土地になっている。

次に、島を追われた元島民の方々の体験談を調べた。島を追われた後、日本人はシベリアへ追いやられ、憤っても食べなければ生きていけない状況で、気の抜けない生活だったそうだ。元島民の方のインタビュー記事では「日本の領土だったことに間違いはないのだから、返還してもらいたい。私が住んでいた宝島なんだから。生きているうちに『父さん、母さん、島が返ってきたから、頑張ったかいがあったよ』と言いたい。」とあった。当時、島を追い出された元島民の方々の平均年齢は今では八十歳以上だ。人生百年時代というが、人が生きられる時間は限られている。人生の残った時間で故郷に帰りたい、という切実な思いが伝わってきた。

ただ、北方領土に住んでいるロシアの方々はこの問題をどのように思っているのだろうか。そう思い、私は北方領土に住むロシアの方々の意見をネットで調べたり、北方領土に行ったことのある先生の話を詳しく聞いたりした。話の中身は同じで「北方領土を見つけたのは私たちロシア人だ。」「北方領土を開拓したのはロシア人だ。」という声があった。歴史を調べてみても、北方領土は日本の領土だという記述がある。しかし、現在北方領土に住むロシアの方々は自分たちのものだと思っている。さらに、北方領土では、その場所に住むロシアの人々の暮らしがあり、「日本に返したくない」という声も高まっている。北方領土にロシア人が住むようになって八十年近くが経ち、一家三世代以上の家庭もある。北方領土で生まれ、学校に通い、働くロシア人にとっても島は「故郷」になっている。

私は北方領土について調べてきたが、改めて難しい問題だと実感した。日本は北方領土の返還を求めているが、取り戻したいがために、今住んでいるロシアの方々を強制送還するのは、元島民の方々が故郷から離れた苦しい日常の二の舞になってしまう。現在、北方領土は日本人が立ち入りにくい状況だ。私は北方領土の出入りが自由にでき、北方領土が好きだという人がそこで暮らせるようにしたい。これからはそのための方法を考えようと思う。

佳作

元島民の方を思って

京都府立木津高等学校
三年　近藤　寧音

北方領土には終戦時、日本人が住んでいました。その数およそ一万七千人。その人達は終戦後、引き揚げまでどのような生活を送っていたのでしょうか。

終戦までは、他の島々とさほど変わらない生活だったそうです。小規模な漁業を営んでいる所が多く、漁業経営者に雇われてやってきた人が独立し家族と暮らし始めたそうです。島では皆が仲良く、一つの物でも二つに分け合う人もいました。しかし病院が極めて少なく、出産がある時は、産婆さんの代わりに経験のあるおばあさんが手伝っていたそうです。また、重病者が出た時は、根室や函館などの島に送り治療していました。

島民は終戦を駐在所のラジオで知り、中には「日本は負けたのか」と涙を流す人もいました。しかし、穏やかな元の生活に戻りつつあった島にソビエト軍が侵攻し、生活は一変しました。昭和二十年八月二十八日頃です。ソビエト軍は腕時計や万年筆などを持ち去り、中には若い娘を差し出すよう要求した軍人もいました。そのため、島民は娘を隠すための空間を家に作り、軍人が来るたびにそこへ隠れている人もいました。空襲に備えるため山の方に大きな防空壕を作り物資をそこへ入れていましたが、ソ連軍に見つかり荒らされ没収されることもありました。

そうした占領下の生活で、日本人は住む場所が半分ソ連人達に占拠されたり、中にはすべてを占拠され追い出された人もいました。ですが中にはソ連人たちと仲良くしている人もいました。パンの焼き方を教えてもらったり、子ども同士で遊んだりと、民間人と民間人では人種の垣根をこえて交流していました。

昭和二十二年頃から日本本土へと強制的な引き上げが開始しました。引き上げが開始してしばらくしたら、ソ連側から「日本へ帰れ。残るならソ連人になれ」といわれる人も出てきました。そうして引き揚げの準備が終わり、日本本土へ向い、本土に住み始めた元島民の方々は今も北方領土のことを思い出すそうです。

元々北方領土に住んでいた人々は、今も北方領土すべての返還を求めています。それは自分や両親、その祖先の故郷にビザなし交流として一時的に行くのではなく、もう一度生活したり、墓参りに行きたいという故郷を思う気持ちがあるからです。

そんな中、北方領土を返還するには、ロシア人に主権は日本にある事を熟知させなければいけないと思います。そこに住み、故郷としている事はロシア人も日本人も同じ。しかし主権は日本であり、ロシアではない。これを熟知させ対話を重ね、両者が納得するまでとことん話を煮詰めることがとても大切だと思いました。

佳作

北方領土について

京都府立須知高等学校
一年　湊　楓華

北方領土問題は、日本国とロシア連邦の間の領土問題のことであり、長年に渡って続いている難しい課題だ。北方領土とはオホーツク海と太平洋に挟まれた、北海道の北東に位置する歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島（北方四島）のことである。これらの島々は一度も他国の領土となったことがない、日本固有の領土である。しかし、一九四五年、第二次世界大戦の終結後にソ連に占領され、それ以来今日まで、日本とロシアの間で領有権を巡る争いが続いている。今もなお、多くの人々がその返還を求めているのが現状である。私たちがこの問題について考えることは、未来の平和的な世界を築くために重要なことだと思い、北方領土問題の解決へ向かうにはどうすればいいのか考えることにした。

考えついたのは対話を重ねることだ。国と国との間で意見の対立があるのは当然のことだろう。しかしそれでも、対話を通じてお互いの意見や立場を理解し合うことが大切だと私は思う。約三〇年続き、二〇二二年にロシア連邦から一方的に停止されたビザなし交流の復活や、日本とロシアの政府が定期的に会議を開き、領土問題だけでなく経済や文化交流についても話し合う場を設けることが必要だと考える。日本とロシアの間には、歴史的な背景が多く存在する。お互いの歴史をしっかりと学び、相互理解を深めることで感情的な対立は避けることができるのではないだろうか。

また、学校教育の中でも北方領土問題についての授業を充実させ、次の世代である若者がこの問題について学ぶことで、将来の日本とロシアの関係をより良いものにすることができるのではないかと思う。昔に比べれば講演会などを通して、自分たちが知らないけれど、他人事では済ますことのできない問題や課題について知ることができていると感じる。だけどそれ以上に充実させる必要性があると思うのだ。

そういった面では、やはり私たち一人ひとりが平和の大切さを理解することが重要になってくるはずだ。私自身これまで平和について考える機会は幾度となくあったものの、じっくり考え、確実に理解できたことは数少なかったように感じる。これからの未来を担う若者が、その理解に向けて北方領土問題に興味や関心を持ち、知ることで理解を深める。私はそれが、平和な世界を築くための始まりになると思う。私たちが平和を望む気持ちを持ち続け、少しずつでも問題が解決に向かうことを願うばかりだ。

佳作

願い続ければきっと叶う

京都市立開睛小中学校
七年　香月　彩花

もし、あなたが生まれ育った故郷が北方領土のように突然他の国に占拠され、もう戻れなくなったとしたら、どう感じますか。

私は社会科の授業で、元島民の方が、約八十年たった今でも北方領土の島に帰りたいという思いを訴え続けている様子を見て、北方領土問題の事の切実さを知りました。

それをきっかけに「ジョバンニの島」という戦前戦後の色丹島を舞台とした映画を観たことで北方領土問題について深く考えることとなりました。また、元島民であり「語り部」として活躍している方々の話を聞く機会もありました。

ロシア連邦は、約八十年もの間、法的な根拠なく不法に占拠しています。当時住んでいた約一万七千人もの日本人が故郷を追われ、樺太へ強制送還され、捕虜として労働を強いられました。中には樺太で亡くなってしまったり、軍隊に殺されてしまったり、船に乗っている途中で亡くなったり、生きて日本に帰られるか分からない状況だったそうです。

北方四島は、法的には一度も他の国の領土になったことはありません。北方領土である国後島、択捉島、歯舞群島、色丹島は日本人が江戸時代に発見し、開拓した日本固有の領土です。日本は、不法に北方四島を占拠しているロシアから返還を求め、全国で北方領土返還要求運動や、二月七日を北方領土の日と定めるなど、様々な取り組みを行っています。

また、北方四島に以前住んでいた人やその親せきなどが、限定された条件の下で実際に島に行ってロシア人と交流する「ビザなし交流」や、お墓参りができる「ふるさと訪問」という機会がありました。しかし、コロナウイルスの流行やウクライナ戦争で日本がウクライナを支援したことにより、それらの交流はなくなってしまいました。

ところで、二〇二二年二月に始まったウクライナ戦争。私は、ロシアによる北方領土不法占拠のことを知れば知るほど、ウクライナで起きている悲劇が、非常によく似た状況であることに驚きました。日本で行われたあの悲劇が、この時代にウクライナで起きているのです。

ニュースで、家族が戦争によって亡くなってしまった、小さいころから住んでいたウクライナの故郷に戻れなくなった、という理由から涙を流している人を見たことがあると思います。そんなことがもう二度とあってはならない。北方領土問題と同じようなことが別の国で繰り返し起こらないようにするべきだ、と私は考えます。

そのために私たちができることは、北方領土について関心を持ち続け、北方領土返還を願い続けることだと思います。願うのをやめてしまえば、やがてロシアの領土になってしまったり、忘れ去られたりして、北方領土は返ってきません。だから、日本の未来を担う私たちが、関心を持つことが北方領土問題の解決へとつながるのだと思います。

北方領土問題と聞いたとき，ロシアに占拠されていることだけ知っている、元島民ではないから関係ない、と思う人がいると思います。しかし、「自分が生まれ育った故郷が突然他の国に占領され、故郷がなくなってしまう。」そう考えたら他人事だとは思えないと思います。元島民の方々は八十年間、島に帰りたい、故郷に戻りたいという思いを背負っています。北方領土問題を他人事ではなく、当事者意識を持って、問題に寄り添うべきだと思います。そうすることが北方領土問題の解決につながるのだと思います。

これらをふまえて、私たちは、当事者意識を持って関心を持ち続け、後世へ伝えていくべきです。そのことが、全国民が北方領土返還を求めて立ち向かっていける力になると思います。私も国民の一人として、少しでも解決に近づけるようにより関心を持って関わっていきたいです。

佳作

私たち次第で大きく変わる北方領土問題

京都市立洛南中学校
二年　青田　琛

北方領土問題は、戦後から続いている領土問題であり、解決するには歴史的理解や、利益にとらわれずに冷静に対応することが大切だと考える。

まず、第二次世界大戦の終結とともに、ソ連（現在のロシア）が北方領土を占領した事実がある。しかし、これについて、日本は北方領土は固有の領土だと主張し、ロシアは、戦争の結果として合法的にロシアのものであると主張している。これは、両国に異なる歴史的理解があるということであり、それが解決されない限り、この問題の解決は困難であると思う。そこで大切になるのが、過去にこだわりすぎずに、現在と未来に目線をむけ、両国が冷静で現実的な視点を持つことだと考える。日本とロシアが利益を統一させ、柔軟な判断をするには、エネルギー協力や学生間交流などを通じて経済的に協力したり、文化を交流したりして信頼関係を築くことが重要だと考える。

しかし、現在、ウクライナ侵攻をしているロシアに対して、あまり良い印象を持つ人は少ないだろう。そこで、日露の二国間だけでなく、国際社会に協力を求めることも必要だと思う。国際連合や他の主要国と連携し、国際的な圧力を活用するなど、国際的な視点からのサポートがあれば、ロシアと平等で平和的な問題解決が期待できると思う。

また、実際に、私たちがこの問題に直接的に関わる事は難しく、興味を持つ人も少ないため、若い世代に対して、歴史的な背景や現在の状況についての正しい知識を伝えることが大切だと考える。北方領土以外にも不法に占拠されている領土はあり、それについて国民全体が理解度を高め、関心を持つように心掛けることが、将来的にこの問題の解決の基盤となることだろう。私たちが知ろうとする努力も大切なのだ。私は、これらのことがこの問題を解決する上で大切なことだと考える。

領土問題の解決には時間がかかるかもしれないが、未来に目を向けて、両国が冷静になり、着実に一歩一歩、ロシアと関わり合い、自分にできることをすることが重要であると思う。両国が互いを理解し、尊重し、妥協しながら、信頼を積み上げていくことで、未来は平和につながると考える。自分の身の回りでできることから始め、積極的に知識を得て、行動することが求められていると感じる。一人一人が小さな一歩を踏み出せば、大きな力に変化するのだ。

今、この島々に住まれているのは、ほとんどがロシア人で、その日常を脅かすような事をしてはいけないと思う。しかし、日本がそれを許す事は、これからの世界平和について考えると、正しいとは限らないと思う。複雑なこの問題が解決されるのか、それをどれだけ平和的にできるのか、私たちにかかっている。

佳作

みんなの故郷

京都市立下京中学校
一年　藤田あさぎ

日本で一番北にある島、択捉島。

択捉島は、北海道の北部に位置する北方領土の島のうちの一つです。しかし、ロシアという国が、「北方領土は自国の領土である」と主張し、占領しています。これが、「北方領土問題」です。

私は北方領土問題の解決に少しでも近づけるような意見を述べるために、『エトピリカ～想いを紡ぐ鳥～』というアニメを観ました。このアニメは、択捉島にもともと住んでいた人の視点で描かれています。

このアニメを観て一番印象に残った場面は、ロシア兵が勝手に家に入り、家の中を物色する場面です。私は、家にある貴重品がどんどん奪われていく場面を観ていて、胸が締め付けられるような気持ちになりました。そして、ついに択捉島から出て行ってしまう時に、悲しさとともに悔しさもあふれてきて、言葉で表せないような苦しさを感じました。このアニメを観て、やはり、択捉島を含む北方領土は日本の領土であり、ロシアの領土であるべきではないと考えました。

しかし、そのアニメを観た後に、気になるニュースの動画が目に留まりました。そのニュースは、北方領土の島のうちの一つである色丹島出身のロシア人大学生、ラザリナさんへのインタビューでした。その方は、「色丹島が日本の領土になったら、きっと色々な変化があるのだと思う。」と話しておられました。この話を聞いて、日本とすごく似ていると感じました。日本も北方領土から追い出されてしまったときに、人々に大きな変化があったからです。このことから、たとえ違う国だとしても、考え方はほとんど同じであると考えました。

私は、この「どんな関係の国であろうと、考え方はほとんど同じ」ということから、北方領土問題は、その同じ考え同士の日本とロシアが、北方領土で新しい国を創るべきではないかと考えました。社会科の授業で、今、それを行おうとしている欧州連合から学んだことが生かせると思い、この考えにたどり着きました。

北方領土で新しい国を創ることの一番のメリットは、ロシアの人と日本の人のどちらの故郷にもなるということです。今、日本の人は、北方領土に住むことができていません。しかし、もう一度住もうと思ってロシアの人を追い出したら、ロシアの人は、もう一度故郷に帰りたいと思うと私は考えます。日本の人と同じ考えです。それを何度繰り返しても、どちらも幸せになることができません。しかし、新しい国を創ることで、どちらの故郷にもなり、幸せになると考えられます。

私は、北方領土問題が解決に向かわない理由は、「どちらの領土か」という、選択肢が二つしかない問題を解こうとしているからだと考えています。私も、はじめはそうでした。しかし、調べていくにつれて、選択肢は、まだまだあるのではないかという考えにたどり着きました。新しい国を創らなかったとしても、この考え方を忘れないようにすることが大切であると思います。

佳作

私にできること

京都市立久世中学校
一年　西澤　佐保

〝北方領土って何？〟

そう聞かれたとき私は、しっかり答えられる自信がなかった。

だから、「何も知らんと作文なんか書けるか！」と思って、調べてみることにした。小学校のときに習ったし、中学校でも地理で習ったはずだ。覚えていることは、ソ連が勝手に条約を破って攻め込み、乗っ取られたまま返ってきていない、ということだけだった。教科書を開く。

「北方領土は一九四五年に、日本との条約を無視して一方的に侵略してきたソビエト連邦に占拠され、日本人は立ち退かされました。ソビエト連邦はサンフランシスコ平和条約に署名せず、現在までロシアが不法に占拠した状態となっています。日本は、北方領土の返還に向け、ロシアと平和条約を結ぶため、交渉を続けています。」

やはり、不法に占拠しているロシアはおかしいと思った。そこで、元島民の人々の思いを知りたいと思って、次は府立図書館の電子図書で調べようと手を付けてみたが、私には難しいと考え、タブレットで動画を探した。北方領土に関する動画は、全てを見切れないくらいあがっていた。

よく出てきたワードは〝ふるさと〟だ。

北方領土の元島民は、今から七十九年前、暮らしが壊され、島から追い出され、〝ふるさと〟に帰ることができなくなった。そう思うと、苦しい思いになる。

また、そんな中で少し印象に残ったものがあった。サハリンの大学に通う色丹島出身の女性が「私のふるさとであり、大好きな色丹島が、日本の領土になったら、多くの人が島から出て行って移住が進むでしょう。やはりそうなっては、ほしくないですね」と話している。なんと、今、ロシア人にとっても、北方領土は〝ふるさと〟となっていたのだ。

「北方領土は返還すべきである」ことは、正しいと思う。でも、どうやって返還を促すのか、今、住んでいる人たちはどうするのか、そういった面でも考えることが、私にできることだ。そして、何かを思考・判断・表現するには、そのことについて多くの知識を持っていることが必要である。自分の知識はまだまだ浅いから、もっと興味・関心をもって北方領土問題に触れるべきだと感じた。

佳作

平和に解決するとは？

京都市立嵯峨中学校
一年　三浦　克仁

僕は、この作文を書くにあたって、北方領土問題についてあまり知らないことに気付きました。

そこで、まず北方領土について調べることにしました。すると、ロシアが日本の領土である北方領土を、法的根拠なく占拠していることがわかりました。詳しく調べてみると、日本がポツダム宣言を受諾して降伏した後、ソ連軍が北方四島に侵攻し、日本人島民を強制的に追い出したということもわかりました。

これを見て、僕は、ロシアが悪い、と思ったけど、どちらの領土でもなくしたら争いが起きないのではないか、と考えました。でも、どちらの領土でもなくしたら、北方四島でとれる水産物が誰のものでもなくなって、日本の水産資源が減って、魚を使う食べ物の値段が高くなると思いました。

このことを家族と話したら、みんなから「えっ！ダメやろ！」と言われました。家族は、「領土の問題はそう簡単に譲ってはいけない」と言っていました。でも、僕は少しの領土くらいいいのではないか、と思いました。しかし、地理で学習した二百海里の排他的経済水域のことを思い出し考えると、小さな島がとても大きな領域に関わり、大きな意味を持つことを思い出しました。これだから、家族は簡単に譲ってはいけないと言っていたのだとわかりました。また、今、ロシアとウクライナは、領土をかけて戦争しています。ウクライナの人々は、命を懸けて自国の領土を守っています。そう考えると、命と同じほど大切な領土を簡単に譲ることはできないと思いました。

そして、日本は北方領土以外にも、韓国との間で竹島について、中国との間で尖閣諸島についての対立があります。北方領土は、北方領土だけの問題ではなく、北方領土を譲ったら他の領土も同じような展開になっていくかもしれません。そう考えると、はじめは小さな島だと思っていたけれど、小さな島が抱える大きな問題がわかってきました。しかし、これを平和的に解決することはとても難しいことだと僕は思いました。

最後に、みんなが納得して合意できることは、領土問題においてはとても難しいことだと僕は感じました。例えば、自分にとっての平和は、相手にとったら不満かもしれないし、国ごとに文化や考え方が違います。だから、それをわかり合おうとすることで、双方が納得できるのだと思いました。自分の国のことを自分事として考え、「自分には関係ない」や「自分には何もできない」と思うのではなく、事実を正しく知って心に留めておくことが大切だと思いました。

第19回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞作文集

令和7年（2025年）2月8日発行

編集・発行　北方領土返還要求京都府民会議
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議
〒629-1116 京都府船井郡京丹波町市場丸ヶ野4
京丹波町立和知中学校内

印　　刷　株式会社　田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
石不動之町677-2